

一問一答

宮本輝氏に「春の夢」にまつわる背景やエピソードなど、ミュージアムからの質問にお答えいただきました。

■「春の夢」という作品について、思い出をお聞かせください。

書き始めてからずっと、これは失敗作だと思っていました。書き終えて読み直したとき、これはこれであつたと書いていると安堵しました。そういう思い出があります。

■「棲息」から「春の夢」に題を変えたのはいつ頃ですか？

連載を始めてからすぐです。

■「春の夢」のお気に入りのシーンがあればお聞かせください。

最後の2、3枚です。※季節が巡って再び春が訪れ、哲之が新しい一歩を踏み出すシーンです。

■哲之と母、そして自分が一緒に暮らすためのアパートを借りる契約をすでにしていたと泣きじゃくりながら陽子が明かす場面はとてすてきだと思いました。

こんな感動をあたえてくれるすばらしい恋人に会われたのでしょうか？

はい。そういう人と出会いました。

■「青が散る」のヒロイン夏子と「春の夢」の恋人陽子、二人のモデルはいたのですか？

夏子と陽子、宮本さんはどちらがお好きですか？

夏子にモデルはいません。若いころは陽子が好きでした。今は夏子のような女性と食事でもしたいな、と。でも、私にはちょっと若すぎますね。むひ。

■恋人を誰かと取り合つたご経験はありますか？

あつたような、なかつたような……。遠い昔のことです。

■「春の夢」(「棲息」)は、

結核の療養のための休筆期間後、「錦織」の書き下ろし雑誌掲載の翌月(1982年1月号)から、「流転の海」と同時に連載を開始されています。これら3作品の執筆を開始されたのはいつ頃からですか？

34才後半のころではないかと思えます。正確な時期は忘れしました。

■「青が散る」の連載再開、そして「星々の悲しみ」を発表された後に「春の夢」を執筆されています。これら2作品のあとに「春の夢」を執筆されたことには、どのような背景があつたのでしょうか？

さまざま。「青春」というものを書きたかつたんです。そして、それは今しか書けないという気がしたのです。

■哲之が青春を過ごした1970年代はどのような時代であつたと思われませんか？

70年代といえば、全共闘というふうに使われていますが、このころの青年で大学に進学できたのは、わずか20%程度のはずです。あとの80%の多くは集団就職で都会へ出て来た少年が大きくなつたのです。高度経済成長を支えたのは、この集団就職で中学卒業後、ふるさとをあとにした少年少女たちでした。そのことを忘れてはならないと思っています。

■「春の夢」展に何かコメントをいただけますでしょうか？

私のミュージアムのために、絶えず新しい企画を考えて下さつて感謝しています。この「春の夢」展によつて、初めて「春の夢」という作品を読んで下さる方々もいらっしゃると思うと、作品は消えないのだと希望を持つことができます。

平成二十二年五月

宮本輝

